藤原宮跡出土の石釧

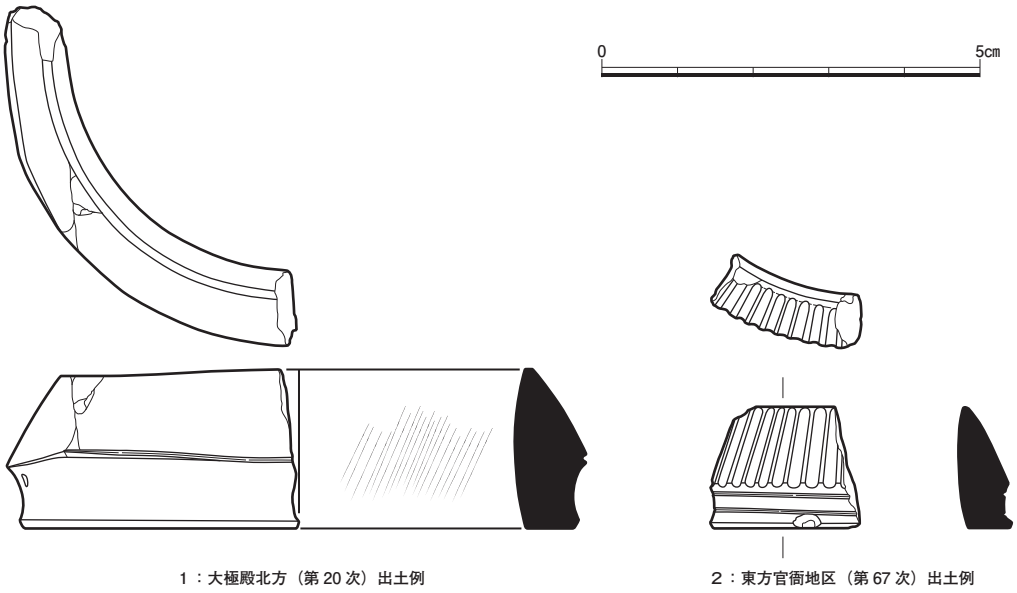
1　はじめに

藤原宮跡では、古墳時代前期に副葬器物として盛行した石釧が２点出土している。本稿では、これらの観察所見を述べ時間的位置づけを評価する。また、石材や製作技術から製作地を検討し、近隣の出土例を踏まえて飛鳥・藤原京周辺地域における石釧流通のあり方を考察する。

2　石釧の出土状況と観察所見

藤原宮大極殿北方出土石釧（図86-1・図87）　藤原宮大極殿北方（藤原宮第20次調査）で床土層から出土した[1)]。環体の約1/4が残存する破片資料で、復元される外径は7.6㎝、内孔の最小径は5.7㎝、高さは2.0～2.1㎝である。環体の頂部は水平ではなく高さが変動するが、幅の狭い平坦面が作出される。斜面は装飾が施されず、大部分はよく研磨されて滑らかな面をなすが、一部で研磨が済んでおらず粗い面が残る。底面から0.9㎝の高さにある斜面と側面の屈曲部には横方向の刻線が彫られるが、一部の区間では斜面側に逸脱し、その続きはとぎれている。側面は匙面が１段作出され、上部には径0.2㎝の小孔が１箇所穿たれているが貫通していない。底面は平坦で、側面との境界は斜めに面取りされる。内孔の径が最小になる高さは1.3～1.4㎝と全高の中ほどで、そこから上下に湾曲して広がる。内面上部には右上がりの細かい擦痕が観察され、研磨によるものと考えられる。石材は硬質な層と比較的軟質で気泡を多く含む層が交互に連続する葉理構造が発達している（Ⅳ群）[2)]。赤色顔料の付着は見られない。

藤原宮東方官衙地区出土石釧（図86-2・図88）　藤原宮東方官衙地区（藤原宮第67次調査）において、調査区南部の遺構検出面である暗褐色砂質土から出土した[3)]。環体の約1/9が残存する破片資料で、小片のため正確な径の復元は難しいが、外径は７㎝、内孔径は5.5㎝程度であったと考えられる。高さは1.6㎝である。デザインは、斜面には陰刻の櫛歯状装飾が、側面には匙面が１段配される。環体の頂部はわずかに幅をもつが、明瞭な平坦面は作出されない。横方向に周回する線刻が、側面の上部と下部に計２条彫られ、屈曲部には彫られない。内面には目立った加工痕や穿孔痕は観察されない。底面は平坦で、側面との境界は垂直に面取りされる。内孔の径が最小になる高さは1.0㎝で、そこから上下へ湾曲して少し広がる。石材は淡緑色の軟質石材で、気泡や鉱物の粒は目立たない（Ⅲ群）。赤色顔料の付着は見られない。



1：大極殿北方（第 20 次）出土例　　2：東方官衙地区（第 67 次）出土例

図86　藤原宮跡出土石釧　1：1

図87　大極殿北方（第20次）出土例

図88　東方官衙地区（第67次）出土例

3　石釧の評価と位置づけ

藤原宮大極殿北方出土石釧　本資料は、斜面が装飾されておらず研磨も部分的に不十分で、斜面と側面を区画する横方向の刻線もとぎれていることから、製作途中で何らかの原因により廃棄された未製品と考えられる。製作工程の中では、円盤状の未製品を穿孔した後に斜面と側面を割り付け、石釧のデザインを付加する工程の最中に製作が中断されたとみられる。穿孔工程では内面の形状と擦痕から、ロクロ回転を利用しない打割による穿孔後に上下両側から研磨調整がなされる穿孔Ｃ技法[4]が採用されたと考えられる。製作が中断された要因は不明だが、斜面と側面の屈曲部が部分的に下方へずれることから、割り付けの失敗や未製品加工中の破損といった原因が考えられる。また側面に穿たれた小孔が、破片を連結するための補修孔を開けようとした痕跡だとすれば、破損後も製品化する試みがなされた可能性がある。

藤原宮東方官衙地区出土石釧　本資料は、頂部の平坦面の作出が省略されている点や、屈曲部の横方向の線刻が省略される点から、筆者の分類・編年[5]でC-Ks3式に位置づけられる。C-Ks3式は石釧段階Ⅴに出現する型式で、段階Ⅴは古墳時代前期後葉の後半に相当する[6]。穿孔は内面の形状から、打割による穿孔後に上下両側から研磨調整がなされる穿孔Ｃ技法が採用されたと考えられる。

4　藤原宮出土石釧の生産について

Ⅳ群石材を用いた石釧の製作地　藤原宮大極殿北方例は未製品のため、藤原宮周辺で製作された可能性がある。しかし、未製品や製作残滓などの生産関連資料は本例以外に飛鳥・藤原京周辺地域で出土しておらず、本地域ではⅣ群石材は産出しないため、断定するには物的証拠に乏しい。本例の完成品にあたるⅣ群石材を使用して穿孔Ｃ技法によって内孔を作出する石釧は、前期後葉後半（筆者の編年で段階Ⅴ以降）に非常に盛行する。Ⅳ群石材の産出地は知られていないものの、福井県の越前地域北部に位置する坂井市河和田遺跡とあわら市伊井遺跡でⅣ群石材に穿孔Ｃ技法を用いた車輪石や石釧の未製品や完成品が出土している（図89-1～3）。したがって、Ⅳ群石材を用いた石製品の製作地は越前北部地域が想定されてきた[7]。藤原宮大極殿北方例により、石材が北陸から畿内地域に持ち込まれ、製作技術が移入された上で石釧が生産された可能性を考慮する必要がある。

同様に畿内地域で腕輪形石製品が生産された可能性を示唆する事例として、大阪府八尾市の久宝寺遺跡で出土した車輪石の未製品が挙げられる（図89-4）。久宝寺遺跡例は、大極殿北方例と同じⅣ群石材を原料に製作されているものの、大極殿北方例やⅣ群石材を用いた多くの完成品と内面の形状が異なり、ほぼ直線的に上へ向かって広がる。また、内孔を上から観察すると角を残す多角形状を呈し、屈曲点が凹んで内面には縦方向の粗い擦痕がみられる。以上の観察結果から、久宝寺遺跡例の内孔の穿孔には、環状に複数の小孔を穿ち、内孔部分を打ち貫く穿孔技法（以下、穿孔Ｄ技法と呼ぶ）が用いられたと考えられ、大極殿北方例とは製作技法が異なる。同じ石材が畿内地域に持ち込まれたとしても、北陸の製作技法を直接採用したり、新たな穿孔技法を採用したりするなど、小地域によって石製品生産の受容・導入のあり方が異なっていた可能性がある。穿孔Ｄ技法は、前期後葉後

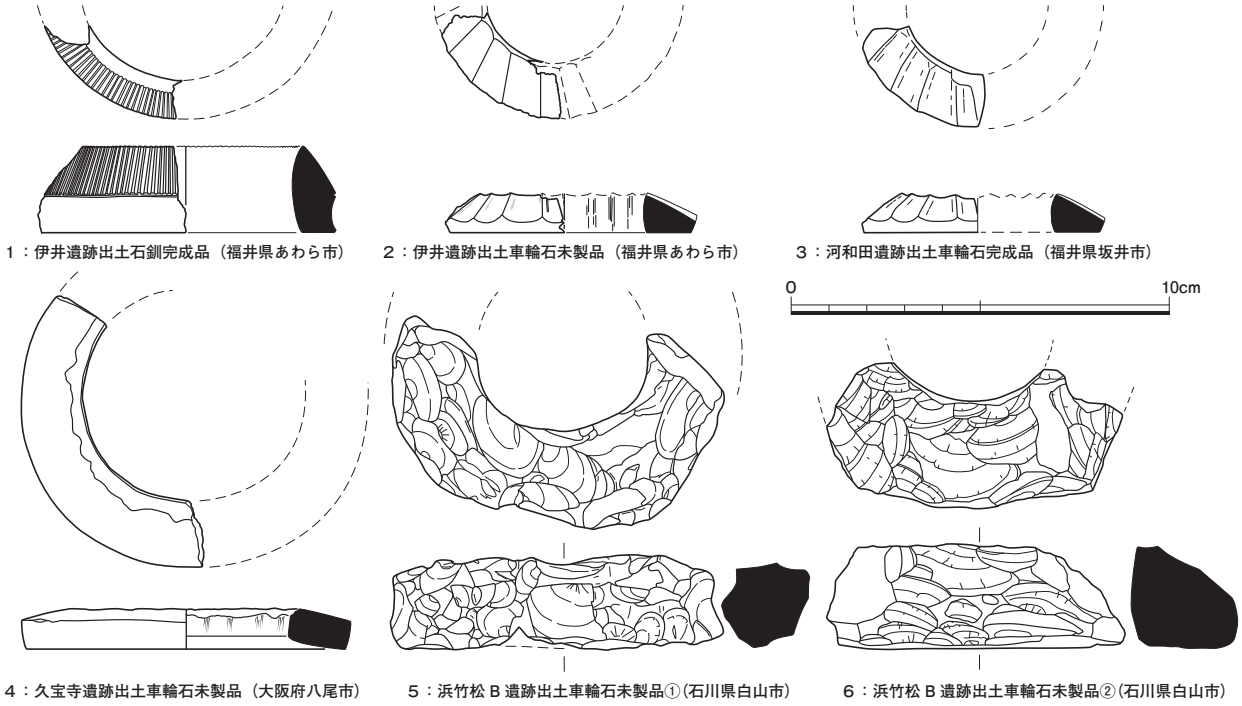


図89　Ⅳ群石材・穿孔Ｃ技法を用いる生産遺跡出土資料　１：２

半以降生産される滑石製腕輪形石製品に採用されたことが指摘されており[8]、久宝寺遺跡例は穿孔Ｄ技法と滑石製腕輪形石製品の出現を考える上でも興味深い。

穿孔Ｃ技法を用いた石釧の製作地　穿孔Ｃ技法は主に越前北部地域でⅣ群石材に対して用いられた技法であるが、藤原宮東方官衙地区例のように、軟質なⅢ群石材に対してもしばしばその使用が確認される。石川県加賀北部地域の白山市浜竹松Ｂ遺跡では、近隣で産出するⅢ群石材に打割によって穿孔した、あるいはその後研磨調整した環状の未製品が出土しており、Ⅲ群石材に対しても穿孔Ｃ技法が用いられたことがうかがえる（図89-5・6）。しかし、浜竹松Ｂ遺跡で出土した未製品はいずれも環体幅が広く、車輪石の未製品である可能性が高い。加賀北部地域における石釧生産は、浜竹松Ｂ遺跡を含めて回転を用いた穿孔後に下側から研磨調整する穿孔Ｂ技法が盛んに用いられており[9]、Ⅲ群石材に穿孔Ｃ技法を用いた石釧生産は副次的なものであったと考えられる。以上の状況から藤原宮東方官衙地区例の製作地は、Ⅲ群石材を持ち込んで越前北部地域で製作された可能性と、加賀北部地域にて域内で採れるⅢ群石材で製作された可能性を挙げつつ、現時点では前者の蓋然性が高いと考える。

5　藤原宮跡出土石釧の流通について

近隣の石釧出土例　藤原宮跡出土石釧の流通のあり方を考察するため、 近隣の石釧出土例を確認する。明日香村の藤原宮左京十二条一坊で出土した石釧は、Ⅳ群石材に穿孔Ｃ技法が用いられており、大極殿北方例をそのまま完成させたC-Ks2式に位置づけられる（図90-1）。高取町越智遺跡でも、Ⅳ群石材に穿孔Ｃ技法を用いて製作されたC-Ks3式の石釧が出土しており（図90-2）、材質・デザイン・製作技法が共通する石釧が近接距離に分布する状況が見て取れる。一方で、越智遺跡ではやや硬質な緑色凝灰岩に穿孔Ｂ技法を用いて製作されたB-Rs3式の石釧も出土しているほか（図90-3）、高取町薩摩11号墳でも軟質なⅢ群石材に穿孔Ｂ技法を用いて製作されたB-Ks3式の石釧が出土しており（図90-4）、これらの製作地は加賀北部地域が想定されることから、複数の製作地からもたらされた石釧が混在すると考えられる。

飛鳥・藤原京周辺地域の石釧生産と流通　上記の石釧は、いずれも前期後葉以降に出現した型式であり、飛鳥・藤原京周辺地域では前期後葉以降に石釧流通が本格化した様相が見て取れる。また、Ⅳ群石材を北陸から持ち込み

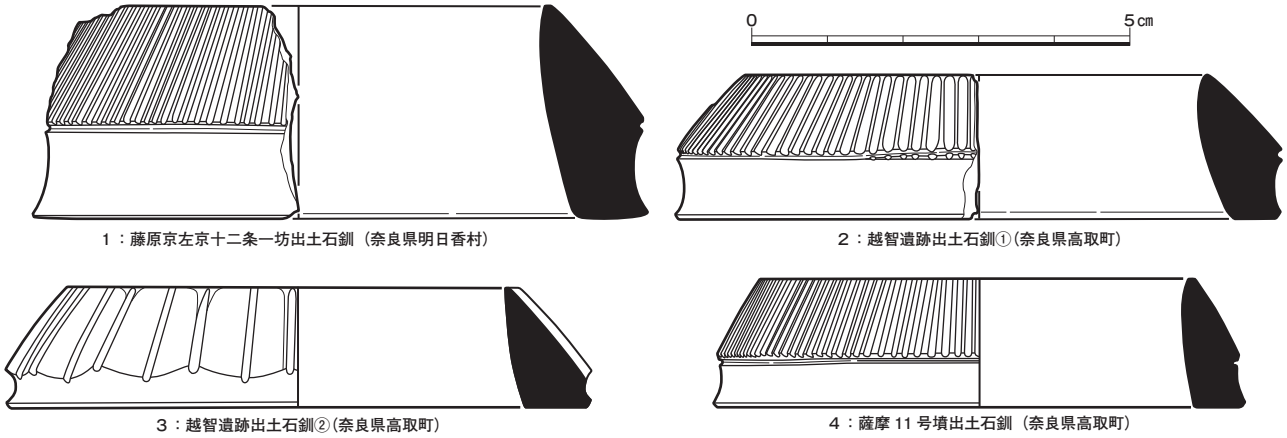


図90　飛鳥・藤原京周辺地域出土石釧　1：1

域内生産した可能性や、そのまま域内で流通した可能性を指摘できるものの、断定はできない。いずれにせよ、複数地域で製作された製品が混在している点、回転を用いた穿孔の後で研磨調整をおこなわない穿孔A技法を用いる加賀南部地域産の石釧を組成に含まない点が本地域で流通した石釧の特徴として挙げられる。同様の組成は京都府京田辺市興戸２号墳や大阪府柏原市茶臼塚古墳などの石釧が多量に副葬された古墳でも確認される[10]。複数の製作地に由来する石製品が混在しつつも組成的な偏りがみられる状況は、石製品を集積・配布する有力集団の分節的な状況が反映されている可能性がある。

6　まとめ

藤原宮跡で出土した２点の石釧は、藤原宮造営にともない破壊された古墳や集落遺跡に由来すると考えられ、当初の使用や埋納・廃棄状況を直接反映していない。しかし、その製作技術や材質に着目することで飛鳥・藤原京周辺地域における石製品生産・流通のあり方をうかがうことができた。石釧２点は、藤原宮造営以前の本地域における有力集団・有力者の動向をあきらかにする１つの手がかりとなる。　**（二村真司）**

謝辞

本論文の執筆に際し，下記の機関から資料調査のための格段のご配慮とご協力を賜った。末筆ながら記して謝意を表す（五十音順）。明日香村教育委員会、あわら市教育委員会、公益財団法人大阪府文化財センター、高取町教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、白山市観光文化スポーツ部文化課。

註

1）『藤原概報 8』、13頁。
2）石材は岡寺良の目視分類（岡寺良「石製品研究の新視点－材質・製作技法に着目した視点－」『考古学ジャーナル』453、1999）に修正を加え、色調と硬軟の差によって以下のⅠ～Ⅳ群に区分する。
　Ⅰ群：濃緑色の硬質石材で、比重は大きい（2.5～2.8）。
　Ⅱ群：淡緑色の硬質石材で、比重にばらつきがある。
　Ⅲ群：淡緑色の軟質石材で、比重は小さい（1.4～1.8）。
　Ⅳ群：層状の葉理構造が発達する。比重は1.9～2.1。
3）『藤原概報 26』、12頁。
4）二村真司「石釧の生産と編年」『考古学研究』69-1、2022。
5）前掲註４文献。
6）大賀克彦による古墳時代の時期区分（大賀克彦「凡例　古墳時代の時期区分」古川登編『小羽山古墳群』、福井県清水町教育委員会、2002、1-20頁）では前Ⅵ期が該当する。
7）三浦俊明「北陸における古墳時代前期の石製品生産」（『石川県立歴史博物館紀要』19、2007）・前掲註４文献。
8）北山峰生「石釧」（『北和城南古墳出土品調査報告書』奈良国立博物館、2017）。
9）前掲註４文献。
10）二村真司「京田辺市興戸２号墳の石製品」（『京都府立大学歴史学科フィールド調査集報』９、2022）・前掲註４文献。

挿図出典

図86　筆者実測・トレース。
図87　筆者撮影。
図88　筆者撮影。
図89　１・２・４：筆者実測・トレース。３：前掲註６文献、16頁を再トレース。５：松任市教育委員会『松任市浜竹松　B（竹松北）遺跡』1993、98頁を再トレース。６：伊藤雅文「古墳時代前期における石製品製作モデル（予察）」『玉文化』６、2009、30頁を再トレース。
図90　筆者実測・トレース。